

氏名	藤原敬介
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	文博第416号
学位授与の日付	平成20年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科行動文化学専攻
学位論文題目	チャック語の記述言語学的研究

論文調査委員 (主査) 教授 吉田和彦 教授 吉田 豊 教授 梶 茂樹

### 論文内容の要旨

本論文は全X部、34章からなる。

第I部(第1章と第2章)「概論」においては、チャック語についての概要を記述した。第1章ではチャック人の来歴やチャック語の系統について略述した。第2章ではチャック語文法のあらましを記述した。本論文の大半はチャック語にみられるさまざまな語を、語類を基準に記述したものである。しかし、第2章については、言語類型論的観点も視野にいれて、文法的に重要な項目ごとにまとめ、チャック語の全体像を描写するようにつとめた。チャック語にみられる類型論的な諸特徴をあげれば、以下のようになる。

- ・チャック語では7つの母音と26の子音、および高低2種の声調が弁別的である。
- ・チャック語は典型的なSOV言語である。従属要素(dependent)は、ほとんどすべての文法関係において、主要部(head)に先行する。すなわち、ほとんどすべての名詞修飾要素(指示詞,所有者,形容詞的要素,関係節)が主要部名詞に先行する。ただし一部の形容詞的要素については、後続する場合もある。名詞の格は後置詞によって標示される。副詞は修飾対象の動詞に先行する。
- ・チャック語は基本的に従属部標示型(dependent marking)の言語である。
- ・チャック語は、格標示のしかたや、複文の項構造から判断して、いわゆる対格言語(accusative language)である。
- ・チャック語における語は、単音節が主要な意味をなうことがおおいけれども、実際にはさまざまな接辞や修飾要素が付加して、二音節以上であらわれることがおおい。接尾辞や前倚辞(proclitic)が多用される。形態素境界は比較的はっきりしているけれども、接辞のなかには連声の結果として語基(stem)と融合し、境界がはっきりしないものもある。チャック語にはさまざまな種類の派生語や複合語がみられる。
- ・チャック語には大別して四種の語類(word class)がある。すなわち、名詞類,動詞類,副詞類,小辞類である。小辞類はとじた類(closed class)をなすけれども、そのほかの語類はひらいた類(open class)であり、最近でも借用語が流入している。
- ・名詞類の下位区分には、人称代名詞,数詞,類別詞などがある。いずれもとじた類をなす。所有者は属格後置詞-Gáで標示されることがつねである。しかし、人称代名詞が所有者である場合には、属格があらわれないこともある。
- ・動詞の下位区分には形容詞的動詞がある。形容詞的動詞には状態動詞がおおいけれども、そうではないものもある。チャック語の動詞には、あきらかに形態的区別をもつ自動詞と他動詞の対がいくつか確認されているけれども、生産的なものではない。時制やアスペクトは動詞と助動詞、あるいは述部標識とのくみあわせによってしめされる。いわゆるムードにかかわる要素は、助動詞あるいは文小辞によってしめされることが普通である。
- ・人称代名詞は人称と数にしたがってことなる形式がある。二人称では尊敬をあらわす特別な形式をマルマ語から借用している。数には単数と複数の区別がある。

- ・指示詞には、形態的に区別される三種類がある。意味的な区別は、指示対象との距離や目に見えるかどうかという基準による。このうち、直接指示の má（これ）がもっとも広範囲にもちいられ、照応においても頻出する。指示詞は、語類としては名詞修飾小辞に属する。
- ・チャック語には、確認されているだけで100以上の類別詞がある。類別詞はつねに数詞とともにもちいられる。類別詞にはチャック語固有形式とマルマ語からの借用形式がある。チャック語固有形式の類別詞は固有形式の数詞とともにもちいられるのに対し、マルマ語からの借用形式の類別詞は、マルマ語形式の数詞とともにもちいられる。
- ・チャック語の名詞化標識-gáはさまざまにもちいられる（第30章）。名詞に後続する場合には属格後置詞、動詞に後続する場合には関係節標識としてもちいられることを基本とする。ほか、従属節や所有構文における意味上の主語をあらわしたり、未来をあらわす述部標識、日本語の「のだ」文に類似したはたらきをすることもある。
- ・チャック語の基本語順はSOVである。しかし実際には、さまざまな語順がかなり自由にあらわれる。どのような語順であられるかは、談話構造に依存しているようにおもわれる。また、文脈から理解されるならば、項は頻繁に省略される。
- ・チャック語には敬語表現に特有の語彙や形式があるわけではない。人称代名詞の一部にマルマ語からの尊敬語形式が借用されているのみである。男女のちがいが言語形式のちがいに反映しているようにおもわれぬ。
- ・チャック語に顕著な現象として、精巧表現（第29章）がある。基本となる語に対して、意味が類似する要素、あるいは特に意味がなく韻をふむような要素を付加して、基本となる語と類似したべつの語をつくりだすことが頻繁におこなわれる。

第Ⅱ部（第3章）は「音韻論」である。第3章ではチャック語の音声と音韻を具体例をもとに記述した。

第Ⅲ部（第4章から第6章）は「形態論」である。第4章ではチャック語の接辞について、接辞の基準をしめしたあと、具体的に記述した。第5章ではチャック語の複合語についてありうるくみあわせを網羅的に記述した。第6章ではチャック語にみられる派生についてのべた。

第Ⅳ部（第7章から第13章）ではチャック語の名詞にかかわる諸問題をあつかう。第7章では名詞句の概要をしめした。第8章では名詞の述部標識について記述した。第9章では人称代名詞について記述した。第10章では数詞、第11章では類別詞について、網羅的に記述した。第12章では後置詞について、小辞形式のものと名詞形式のものにわけて記述した。第13章では名詞を修飾する各種の小辞についてのべた。

第Ⅴ部（第14章から第18章）ではチャック語の動詞にかかわる諸問題をあつかう。第14章では動詞をさまざまに分類し、特に注意すべき動詞について具体的にのべた。第15章では動詞句の概要を記述した。第16章では助動詞を18種に分類して記述した。第17章では動詞につく述部標識について記述した。第18章では動詞連続について記述した。

第Ⅵ部（第19章と第20章）ではチャック語の副詞と感嘆詞をあつかった。第19章では副詞について、第20章では感嘆詞について、具体例を中心に記述した。

第Ⅶ部（第21章から第23章）ではチャック語の従属節にかかわる諸問題をあつかった。第21章ではさまざまな従属節標識を整理した。第22章ではありうる補文の構造についてのべた。第23章では関係節と、相関関係節についてみた。

第Ⅷ部（第24章と第25章）ではチャック語にみられるその他の小辞をあつかった。

具体的には、第24章で文に付加しうる小辞について、第25章でさまざまな要素に付加しうる小辞についてのべた。

第Ⅸ部（第26章から第29章）では、これまであつかいきれなかったチャック語における文法現象のうち、特に重要なものをあつかった。第26章では疑問語をあつかった。第27章では引用文について考察した。第28章ではチャック語にみられる精巧表現について定義し、具体例を記述した。第29章ではチャック語文法においてさまざまに機能する小辞-Gáについて整理し、統一的な機能がありうるかどうか、チベット・ビルマ諸語を中心に他言語との比較も視野にいれて検討した。

第Ⅹ部（第30章から第34章）は附録である。第30章では、チャック語の音素配列としてありうるくみあわせを網羅的に記述した。第31章では本論文の基本資料である、民話を中心としたチャック語に資料についてのべた。第32章では、民話資料のうちのいくつかを具体的に提示した。第33章ではチャック語の基本語彙をバングラ語、マルマ語と対照してあげた。第34章ではチャック語とマルマ語の音対応を記述した。

## 論文審査の結果の要旨

チャック語 (Cak) は、バングラデシュ人民共和国のチッタゴン丘陵に居住する少数民族のひとつであるチャック人の言語である。話者数は、およそ2,000人と推定されている。系統的には、チベット・ビルマ語派ジンポー・ヌン語支ルイ語群に属すると一般に考えられている。チャック語についての先行研究としては、1950年代から1960年代にかけてこの地域で調査を行なったLucien BernotとLorenz Löfflerの研究があるが、400ばかりの基礎語彙の収集や音韻論のスケッチにとどまっており、体系的な言語学的記述とは言い難い。

本論文は、バングラデシュに滞在した2年の期間を含めて、1999年7月から17回に及ぶ現地調査によって論者が収集した資料に基づく記述言語学的研究である。400字詰め原稿用紙に換算して、4,000枚を超える労作であり、これまでの研究水準を飛躍的に高める意義ある成果とすることができる。また、必要に応じて周辺の言語、特にマルマ語 (Marma) との比較も行っている。チャック人のかなり多くはベンガル語も使うために、調査においての媒介言語として論者はベンガル語を用いている。

論文は全10部34章から成り、音韻、形態、構文についての重要事項が網羅的に扱われている。第10部には、チャック人の調査協力者から直接収集し、音韻表記された7つの民話資料、チャック語、マルマ語、ビルマ語、ベンガル語を対照させた基礎語彙およびマルマ語との音対応が付されている。これらの補助資料もたいへん有用であり、関係の研究者に今後長く利用されるであろう。

本論のはじめに論者が提出したチャック語の音韻論は、先行研究のものとは多くの点で異なっている。それは従来の研究に欠落していた体系的な分析の帰結にほかならない。すなわち、まず音節構造のタイプを示したうえで、子音音素が音節のどの位置にあらわれるかに配慮しながら、音韻としての対立を示す最小対をおのおの子音について提示している。その場合、有声子音と無声子音の交替の要因である連声の問題も別個に取り扱っている。母音についても、隣り合う子音との分布に注目しながら、音韻対立を担う最小対の例をデータから引き出している。また、声調についても基本的に低調と高調の対立しかならないことを明らかにしている。

形態論・統語論の面で特に注目されるのは、動詞連続についての考察である。動詞連続とは2つの動詞あるいは動詞句が連続してあらわれる構造のことをいう。一般的に動詞連続は、主要部が前の動詞であるか、後の動詞であるか、両者が対等の資格を持つかによって3つの類型に分けることができる。このうち1番目と3番目のタイプがチャック語にみられるが、否定要素があらわれる位置の違いに基づき、チャック語の動詞連続は3番目のタイプに限られており、1番目のタイプは動詞と助動詞とから成る動詞複合体であると主張する。

論文の後半部で扱っている小辞-Gáの分析も興味深い。チャック語のこの小辞にみられる機能は多様であるが、類似した機能が他のチベット・ビルマ諸語やアジアの諸言語にもみられることを論者は指摘している。それらの機能のなかには分派諸語内部の歴史のなかでの二次的発展によって獲得されたと思われるものもあるが、祖語から来源したと想定されるものもある。チベット・ビルマ諸語比較研究の今後の進展によって、この小辞が辿った先史をより正確なたちで解き明かされることが期待される。

論文全体を通して論者が一貫して取っているのは、未記述の言語の研究を進めるにあたって重要なのは可能な限り多くのデータの収集にあるという研究態度である。もとより、困難なフィールド調査によって得たデータが調査者にとって貴重であることは言うまでもない。しかしながら、実例を提示する際にはもう少し枝葉を刈り込む努力がなされてよいように思う。徹底した実証性の結果とはいえ、個々の実例を検討しながら最後まで集中して読み終えるには読む側に相当の忍耐力が求められる。ただし、これは本論文の内容自体の価値を損なうものでは決してない。

本論文は、これまでほとんど手付かずの状態にあったチャック語文法の全容を解き明かしたレファレンス・グラマーであり、きわめて優れた研究として評価できる。個別的問題については今後の調査によって書き改めなければならない部分もあるに違いない。しかしながら、他の研究者が俯瞰しうる全体像を提示したことの意義は大きい。

以上、審査したところにより、本論文は博士 (文学) の学位論文として価値あるものと認められる。平成19年12月12日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄らについて口頭試問を行った結果、合格と認めた。